



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 謹賀新年

### 「道を歩く人がやってきた」 ①

二人のインド在住者がやっと日本に帰ってきた。コロナ災禍で帰国（日本訪問）が延び延びになっていたのである。このお二人がインドの香りで浄めて下さった。

このお二人とは地域的なご縁がある。わが家族は山陰の山奥から大阪に出てきて、ミトラ城近くの青果市場で卸業をしていた。経済的発展にともない人件費高騰などで採算がとれなくなり、大阪市都島区の市場で鶏肉鶏卵の小売業をすることになった。この市場の近くにお二人のご家族が住んでいた。つまり、わが家業のお客さまであったかもしれないのである。

もう一人、ヒッピー仲間S（宮崎在）も住んでいた。

「卵を買いにいったら、お兄ちゃんが卵を電球にかざして、紙袋に入れてくれた」

まれに卵が孵化していることもあるので、それを確認するように母に言われた。

その凛々しい姿にSは感心したと、昔日の記憶を語った。誰だろう、そのカッコイイお兄ちゃんこそ、中学時代のわが輩である。

この市場のもっとも近くに住んでいたのがT家で、そのご子息がT神父である。わが輩より若いので直接のコンタクトはなかった。コルカタで初めてTさんに出会った。

Tさんは学生時代にマザー・テレサの施設でボランティアの経験をした。京都の大学院を卒業して大阪府庁に就職した。順風満帆な出世街道を上り詰める、とご両親は思っていたであろう。ところが、突然にマザー・テレサの修道会「神の愛の宣教者会」に入団すると言い出した。ご本人はゆるやかな決意であったかもしれないが、ご両親、特に母親にとっては突然の告白であったであろう。だいじな大事な一人息子である。

T家は浄土真宗の檀家であった。キリスト教についての知識はなかった。老いては子に従え、というわけではないが、母は学びを始めた。母の強さである。わが輩のお笑いエッセイを所望され、その一端に加えていただけることになった。あまりにも光栄すぎて、へたなことが書けなくなった。

この強さはどこから生じたのであろうか。もちろん先天的な「母性」もあろうが、その苦難に由来するものではないだろうか。

一九四五年三月から始まった大阪空襲は敗戦の日まで続き、大阪は焼け野原になった。わが輩の父母と姉は造幣局近くに住んでいたが、その直前に故郷に疎開していた。わが家族には避難する田舎があったが、T家にはなかった。

「田舎に親戚もなく、家族七人、これからどのようにして生きて行くか？その時新聞には、新天地で、酪農者募集欄が、毎日出ていて、これしかない、思い切り百八十度決心をしました」

ところが、九月に入植した土地は新聞記事のような話とは天と地ほど違い、ジャングルのような土地であったが、もう引き返すお金がなかった。初めての冬を、急ごしらえの家屋で迎えることになった。すき間から容赦なく雪が入り込み、寝ている布団の上に降り注いできた。

両親は都会育ち、四歳の彼女も大阪生まれであった。小学生になると雪の上を下駄ばきで学校にかようことになった。過酷な入植生活が十二年も続くことになった。

わが輩は絵画活動で、青森県下北半島の美須々村に行ったことがある。そこは長野県からの入植者の村であった。わが輩の母方の祖父の弟は北海道へ開拓農民として入植した。いずれも農家出身であった。都会育ちの家族には、二倍の苦難が待ち受けていた。

医者もない、薬もない開拓地で「生きて行くのに親も子必死でした」と手記に書き綴っている。彼女が中学三年生のとき、一家は見切りをつけ四日間かけて大阪に帰ってきた。中学を卒業するとハンカチ工場で働いたが、学びを得るために夜学に通うことにした。級友の半分は片親であった。両親のいる自らを顧みて、感謝の念をいただいたと言う。

このような苦勞と忍耐、それに依って育まれた感謝の心情が、Tさんに浸透していたのではないかと、わが輩には思える。

Tさんのミサから、それを拾い上げてみよう。

ある若いシスター（インド人修道女）がTさんに問うた。

「どうしたら、私は自分が成長していることがわかりますか」

もちろん、彼女は身体的ではなく、精神的なことを問うている。おそらく彼女は奉仕修道生活への疑問や、自分の靈性的な成長に焦りを感じていたのであろう。

Tさんは少し考えて。

「あなたがあきらめなければ、あなたは成長しています」

「時には心配になるし、疑心暗鬼になることもあります。でも、あきらめないことはとても大切なことで、あきらめないなら成長しているはずですよ」

このポジティブな思考は、キリスト者故にというより、母からの賜物のように思える。

実はこの賜物は、だれでも、母から、あるいは母なる「存在」からすでに与えられている。ただそれに気づかない、あるいは気づかないふりをしているだけではないか、と思う。

ポジティブな思考は新年に相応しい。駄目元でもよい。三日坊主でもよい。とにかく、自分の外にでてみよう。結果がダメでも、来年にはまた「新年」がやってくる。